福岡市埋蔵文化財調查報告書第537集

大谷遺跡群

- 席田大谷遺跡群5次調査-

1997 福岡市教育委員会

序 文

福岡平野は古来より先達の生活の場であったようで、緊急発掘によって明らかになった遺跡も年ごとに数を増してきています。

席田大谷遺跡群は、これまでの調査によって弥生時代から古墳時代にかけての遺跡として知られています。ここに報告するのは東平尾運動公園の整備に伴って実施された埋蔵文化財の調査結果です。今回の調査で、弥生時代の墓地と古墳時代後期の円墳1基を確認することができました。弥生時代の甕棺群は集団墓の分布を知ることができました。なかでも古墳から出土した鉄器や装身具は当時の葬送儀礼や装いの一端を示す貴重な資料です。将来この報告書が内外の文化交流に役立つことを期待します。

さいごになりましたが、調査を実施するにあたりご協力いただいた関係者のみなさまに心より御礼 を申し上げます。

> 1997年3月31日 福岡市教育委員会 教育長 町田 英俊

本文目次

- 1. 調査の概要
- 2. 弥生時代の遺構と遺物
- 3. 古墳時代の遺構と遺物

例 言

- 1. 本書は、東平尾運動公園の整備に伴って発掘調査した福岡市博多区東平尾運動公園に所在する席田大谷遺跡群第5次調査の報告書である。
- 2. 調査は、福岡市教育委員会を主体に1994年度に発掘調査、1996年度に整理作業を行った。
- 3. 本書に使用する方位はすべて磁北である。
- 4. 遺構の実測は、調査担当者が行った。
- 5. 遺物の実測は、古墳の出土遺物を比佐陽一郎がおこない、弥生時代の遺物は担当者のほか是田敦 (福岡大学大学院) の助力を得た。
- 6. トレースは濱石正子・撫養久美子がおこなった。
- 7. 写真撮影は、遺構を調査者が、遺物を比佐が行なった。
- 8. 金属器類の保存処理は福岡市埋蔵文化財センターにて行なった。
- 9. 出土遺物は、福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管の予定である。
- 10.本書の執筆は古墳時代の遺物を比佐が行ない、編集を常松が行った。

遺跡調査番号 9421 遺跡略号 OTN-5 分布地図番号 東平尾 9/144 調査地地籍 博多区東平尾運動公園 調査面積 100㎡と古墳1基(席田大谷2号墳) 調査期間 1994年6月10日~94年7月28日

> 表紙上 甕棺墓より福岡空港方面をのぞむ 下 席田大谷2号墳全景(南より)

1. 調査の概要

福岡市都市整備局公園建設課から東平尾運動公園の整備事業計画が出された。教育委員会埋蔵文化 財課では、該地が席田大谷遺跡群に含まれることから、現地踏査を実施した。その結果遺構の古墳の 存在が確認されたため調査を行なう方向で協議がもたれた。その後平成6年6月10日から発掘調査を 開始したが、稀に見る異常気象で記録的な日照りがつづき、水不足のため夏以降、長期間の給水制限 となった。調査区は水道もなく、めぐまれた条件とはいえなかったが、無事調査を終えることができた。 調査区の位置については、席田遺跡群7 (福岡市埋蔵文化財調査報告 第357集、1994) を参照のこ と。

調査委託

福岡市都市整備局 公園建設課課

調査主体

福岡市教育委員会 埋蔵文化財課

調査総括

埋蔵文化財課長 荒巻輝勝・折尾 学(前)

埋蔵文化財第一係長 横山邦継

事前審查

主任文化財主事 濱石哲也

長家 伸

庶務

入江幸男(前)・小森 彰(現)

調査担当

埋蔵文化財第一係(当時)常松幹雄

保存処理

福岡市埋蔵文化財センター比佐陽一郎

別府大学(現)本田光子

調査・整理参加者 池田由美・伊藤ミドリ・井上ムツ子・牛尾秋子・牛尾二三子・衛藤美奈子・

菊池栄子・是田 敦・佐藤志津・惣慶トミ子・鳥井原良治・原美晴・

平野義雄・船越恒人・堀ウメ子・堀本歳四郎・柳浦八重子・山西人美・

脇坂レイコ

2. 弥生時代の遺構と遺物

標高50mほどの尾根の先端部で弥生中期の甕棺墓3基を確認した。福岡空港から中心部さらに糸島 方面をのぞむ兆望のきく立地である。土質は花崗岩のバイラン土で、堀型は不明瞭である。3基とも 甕棺の遺存状況はよくない。

1号甕棺墓(K-1)は、最も北側で検出された。単棺の成人用甕棺である。口縁部は断面形がい わゆる鋤先口縁で、口縁下に断面三角形、胴部に2条の「コ」字形突帯をめぐらす。膨らみ気味の胴 部を有する中期後葉の立岩式の古段階に位置づけられる。

2号甕棺墓(K-2)は、尾根の先端部に位置する。合わせ口の成人用甕棺である。上甕は朝顔状 に開口する広口壷の口縁部を打ち欠いたものである。胴部には断面が「コ」字形のシャープな突帯を 回らす。下甕の口縁部は、断面形がいわゆる鋤先口縁で、口縁下に断面三角形、胴部に「コ」字形の シャープな突帯 2 条をめぐらす。中期後葉の立岩式の古段階でも K-1 に先行するタイプである。

出土状況の断面図は上甕が下甕の口縁下に位置しているが、口径の違いから本来は下甕が呑口と なっていたと推定される。

3号甕棺墓(K-3)は、K-2の南側で検出された。合わせ口の小児甕棺である。南から掘り込 んでいる。甕棺は取上げの際、復原不能なまでに細片となり図化しえなかった。口縁部は断面形がい わゆる逆「Li字口縁で、中期後葉時期に位置づけられる。

同一の丘陵上で甕棺墓が検出されたのは今回が初めてである。もともと東側にかけて墓域が広がっていたものと推定される。今回検出した3基は削平を免れた西端部であろう。

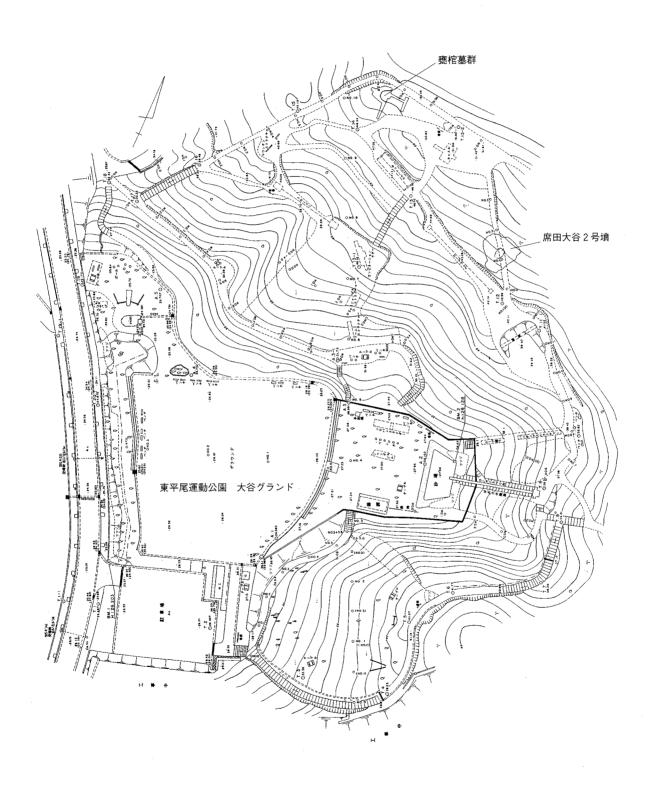


図1 席田大谷遺跡群5次調査区位置図(縮尺1/1,000)

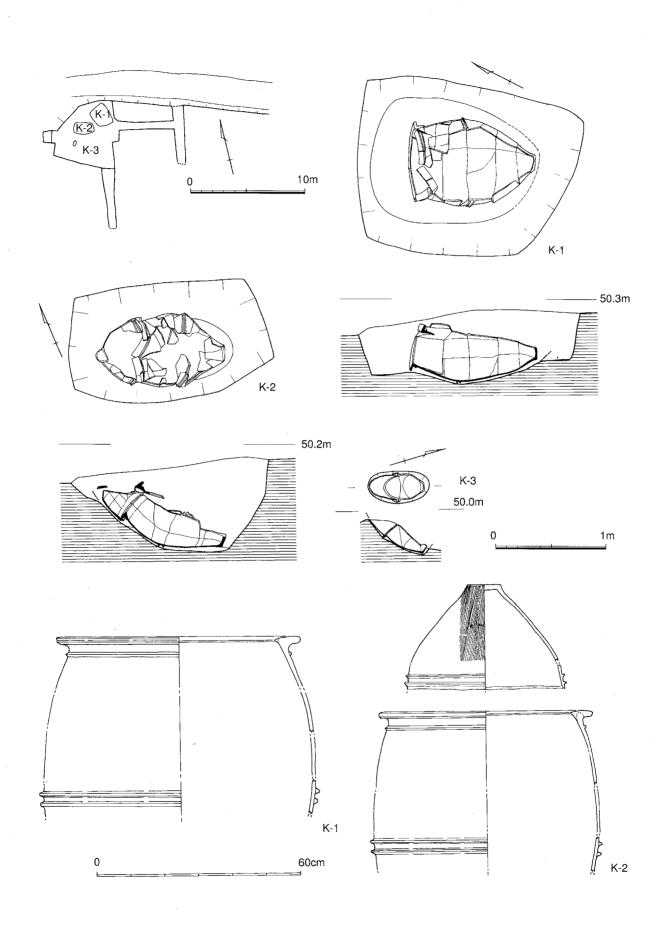


図2 甕棺墓 遺構配置図・実測図(縮尺1/300・1/30・1/10)

3. 古墳時代の遺構と遺物

本古墳の分布地図における名称を席田大谷古墳群第2号墳とし、以下席田大谷2号墳と呼称する。 古墳の現況は散策道によって削平を受けており墳丘は確認できない。花崗岩の矩形のプランが3×2mの範囲で確認できたため古墳の石室とみなし、掘り下げをおこなった。

墳丘の奥壁と西壁、前庭部の3か所にトレンチを設定した。土層観察から、墳丘は北側の尾根の高まりを利用して築かれた径約8m程度の不整形の円墳と推定される。黒色土と黄灰色土を互層のに叩き締めているが、丁寧な版築ではない。

調査の結果、南側に開口する両袖式の平面プランの横穴式石室であることが明らかとなった。石室は奥壁や西壁で基底部を含め5段程度を遺存する。床面からの最大高は現況で1.35mである。玄室の長軸は1.95m、幅は玄門部が1.35m、奥壁で1.55mをはかり、床面には敷石を配している。玄門部を含めた基底部に大ぶりの石材を用いる。玄門の最大幅は45cmで、框石の部分はわずかに高まりがみられる。

出土遺物は、すべて玄室内で検出された。とくに装身具と鉄器が豊富である。奥壁の東隅では着装時の状況をとどめて、ガラス玉や耳環が出土した。耳環の数からして数次の追葬があるが、頭部は奥壁に向けていたと考えられる。
48.5m

埋土

暗灰色土層

土厦灰色土層

暗黄灰色土層

副葬遺物のうち土器の出土が少なく、完形に近いの は玄室の東南隅で出土した短頸壺のみである。

古墳は散策道を迂回させることによって、現状保存 されることになり、石室内に土嚢をいれて埋め戻しを おこなった。

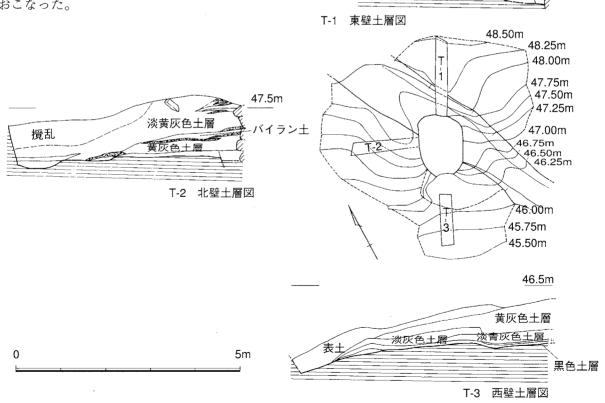


図 3 席田大谷 2 号墳 墳丘実測図(縮尺 1 / 200 · 1 / 80)

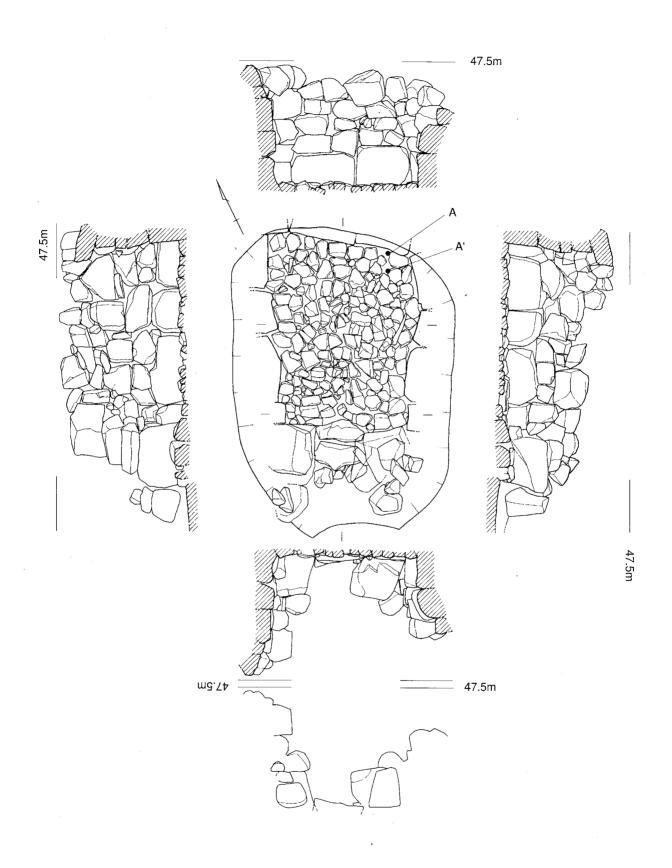


図 4 席田大谷 2 号墳 石室実測図(縮尺 1 / 40)A·A'は図5の実測ポイント

出土遺物

本墳より出土した遺物は以下の通りである。

土器 (図7)

須恵器で形状の分かるものは石室左袖部分から出土した短頸壷と坏蓋があるのみで、他は大甕等の破片数点にすぎない。壷は全高9.7cm、胴部最大径14.6cmを計り、表面からは頸から肩が回転ナデ、底部は回転へラ削り、その間にカキ目が施されている。坏蓋は、かなりの小片から図上復元を試みている為径は不確実である。

装身具 (図8・9)

耳環は金環($1\sim5$)と、銀環($6\sim9$)、そして銅のみの銅環($10\sim13$)がある。金環、銀環は中実の銅胎に金、銀の薄板をかぶせた構造である。金環の1と2、3と4、銀環の6と7、8と9、銅環 4点のうちの2点はその形状と構造の類似性より対になるものと思われるが、残りには対になるものが見られない。大きさ等は一覧表を参照されたい。

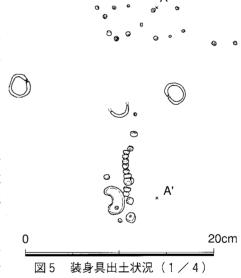
玉類には様々な材質、色調のものが混在している。これらを整理分類すると、硬玉製勾玉1(14)、碧玉製勾玉1(15)、水晶製切子玉1(16)、石製管玉5(17~21)、石製小玉1(22)、琥珀製丸玉1(23)、土製丸玉1(24)、瑪瑙製丸玉3(25~27)、ガラス玉95(28~106)となる。ガラス玉は色調により更に黄色系(透明のものが変色?)1、紺色系65、水色系23、緑色系6に分類できる。また、その形態によっても分類が可能になるものと思われるが、紙幅の関係上詳細は一覧表に譲る(ガラス玉の一部には土ごと取り上げた状態のものが16点あり、これらは今回図化していない。)

なお装身具については、出土状況を見ると被葬者の頭部に あたる部分の攪乱は免れたようで、それによれば玉類に二つ のまとまりがあることが分かる。一つは勾玉を中心とした首 の部分、もう一つは二つの耳環を結ぶラインの上にあり、首 飾りと髪飾りと考えられる。(図5)

鉄製品 (図10·11)

農工具

1は鉄製の鋸である。古墳の出土品としては全国的にも比較的珍しいもので、福岡平野でも数例の出土に限られる。数片に割れており図化した以上に接合しないものの、同一個体と考えて良いであろう。現存する破片の長さの合計は23.2cmを計る。刃は両側に付き個々の刃は二等辺三角形を呈する。押し切り、引き切りの区別が分化する以前の所産と考



えられる。図中右端の破片は破断面が無く、ここが端部と思われるるが、なんとも不可解な形状である。

2は鉄鎌である。ほぼ完形に復元され、全長12.7cm を計る。木質の付着は見られない。

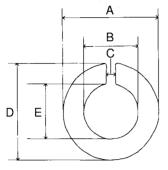
刀子はほぼ全容の分かる 5 点以外に数点の破片がある。 $3\sim 5$ には責金具が、また 3 の柄には木質と思われる有機質が遺存する。12は茎の太さ等に違和感があるが、刀子に含めている。骨片が付着している。全点見ても刃部に有機質の遺存するものは無い。

武器

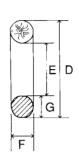
13は全長約40cm の刀で短刀と言って良いであろう。中央部で曲がっていおり、刃部や茎の各所には木質が見られる。また茎には木質の下に繊維状のものを巻いた痕跡があり、柄の下に滑り止めの糸巻を施したものと推測される。

鉄鏃は大きく分けて長頸鏃と広根鏃があり、長頸鏃は関部で数えて11本分、広根鏃は同じく5本分が確認できる。この他鏃身や茎の破片でどれにも接合しないものが数点ある。長頸鏃はその多くが柳葉形で、広根には三角形式(28)、方頭斧箭式(29)、圭頭斧箭式(30)等がある。その他

不明鉄製品(39)は鎖状を呈している。







No. 色調

	計測値(mm)								
No.	材質		Α	В	C	D	E	F	G
	芯材	表面							
1	銅?	金薄板	26, 50	14.70	2.00	24.50	13, 50	5, 40	5, 40
2	銅?	金薄板	27.00	15. 50	1, 50	24, 00	13.50	5.50	5. 50
3	銅	金薄板					3, 80	4.00	3. 80
4	銅	金薄板	20, 50	13, 50		21, 50	13.00	3.90	3. 80
5	銅?	金薄板	23. 50	12, 20	2. 40	21, 20	10, 20	6, 30	6.00
6	銄	銀薄板	33.00	18, 20	1.70	29.00	14.80	7.10	7. 30
7	銅	銀薄板	32. 50	18, 20	2,00	28. 20	15. 50	7. 20	6.80
8	銅	銀薄板	31.00	17.00		26, 50	14.00		7.00
9	銅	銀薄板	33, 00	18, 50	2,00	29, 00	14.50	7.70	7. 50
10	銅	無し	26, 00	17.00	1,00	24, 20	16.00	4.30	5, 00
11	銅	無し	26, 00	16.50	1.00	22, 50	15.00	4.00	4. 30
12	銅	無し	27, 20	18, 00	2, 00	24, 80	16, 00	4. 25	4.40
13	銅	無し						3,00]

表 1 耳環計測表 形式 最大图最大图

No.	色調	形式	最大径	最大長
28	黄色	В	7. 90	6.00
29	紺色系	В	10.00	7, 55
30	紺色系	Aa	8, 25	6. 75
31	紺色系	С	9, 00	4. 90
32	紺色系	В	9. 75	6.65
33	紺色系	D	8, 90	7. 10
34	紺色系	С	9.05	4.40
35	紺色系	В	9. 65	5. 30
36	紺色系	Aa	8.60	6, 20
37	紺色系	Aa	8.00	5. 20
38	紺色系	Ab	8, 00	5, 85
39	紺色系	Aa	8, 55	5, 85
40	紺色系	Aa	7.40	6, 65
41	紺色系	Aa	7, 50	4. 70
42	紺色系	Ab	7.45	4. 75
43	紺色系	Aa	7. 60	5, 65
44	紺色系	Aa	7, 90	6, 75
45	紺色系	Aa	6.80	6.10
46	紺色系	Ab	7. 35	6, 60
47	紺色系	Ab	7. 45	4, 90
48	紺色系	Aa	7. 30	5. 15
49	紺色系	Ab	6, 85	5. 70
50	紺色系	Aa	6, 70	7, 10
51	紺色系	Aa	7.05	6, 65
52	紺色系	Aa	7. 45	5, 10
53	紺色系	Aa	7. 10	5, 40
54	紺色系	Ab	6, 85	5. 90

表 2 ガラス玉計測表

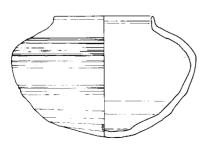
55	紺色系	Ab	7, 40	5, 20
56	紺色系	Aa	7. 20	5, 40
57	紺色系	Aa	6, 65	6, 30
58	紺色系	Aa	6.70	3, 95
59	紺色系	Aa	6,00	5. 75
60	紺色系	Ab	7.00	5, 60
61	紺色系	Aa	7. 70	5. 30
62	紺色系	Aa	6, 85	3, 60
63	紺色系	В	6.85	5, 25
64	紺色系	В	6.65	6.60
65	紺色系	В	6, 70	4.95
66	紺色系	Ab	7.00	5. 25
67	紺色系	Aa	6, 90	5. 10
68	紺色系	Aa	6, 45	5, 15
69	紺色系	Ab	7. 30	6. 10
70	紺色系	Ab	6, 70	4. 25
71	紺色系	Aa	5, 85	2, 95
72	紺色系	В	5. 85	4.85
73	紺色系	C	6.00	4.95
74	紺色系	В	4.80	
75	紺色系	Aa	4.85	3, 60
76	紺色系	В	3, 35	2, 90
77	紺色系	В	3, 50	3. 10
78	紺色系	В	3, 40	3, 35
79	紺色系	В	4, 05	3.90
80	水色系	В	5, 70	
81	水色系	В	5, 30	2, 80

04	小巴尔	AD	4.00	4. 00
83	水色系	В	4. 15	3, 30
84	水色系	В	4. 25	2, 90
85	水色系	Aa	4. 55	3, 00
86	水色系	В	3, 75	3, 30
87	水色系	В	4, 45	2. 75
88	水色系	Ab	4, 40	3, 00
89	水色系	Aa	4. 30	2. 60
90	水色系	В	3, 80	2. 90
91	水色系	В	4.80	2.80
92	水色系	В	3. 55	2. 30
93	水色系	В	4. 30	2.00
94	水色系	В	3, 55	2. 25
95	水色系	D	3.80	2,00
96	水色系	Aa	3. 30	3, 20
97	水色系	Aa	3, 35	2, 60
98	水色系	В	3. 55	2. 10
99	水色系	Aa	3.70	2.70
100	水色系	В	3, 65	1, 90
101	緑色系	Aa	5.00	4. 20
102	緑色系	Ab	4.20	3.55
103	緑色系	Ba	3, 50	3, 50
104	緑色系	Aa	3, 50	3.00
105	緑色系	В	4.65	2. 45
106	緑色系	Aa	4,00	2, 70

形式 最大径 最大長

ガラス玉はその形態から以下のように形式分類ができる。

- A: 穿孔面が平らに研磨されている。
- a:穴の形が正円もしくはそれに近く、径1 mm 前後。穴は研磨面に対し直角になる。
- b:穴の形が楕円もしくは不整形で、aに比べて径が大きい。穴の縁は、凸凹もしくは段が付く。 B:穴のある面に凸凹がある。
- C:表面に気泡による細かい凸凹が見られ、ザラザラしている。
- D:巻き上げの痕跡が見られる。
- これらは成形あるいは研磨の工程で異なった方法が用いられたことに拠るものと考えられる。



0 10cm

図7 古墳出土須恵器実測図(1/3)

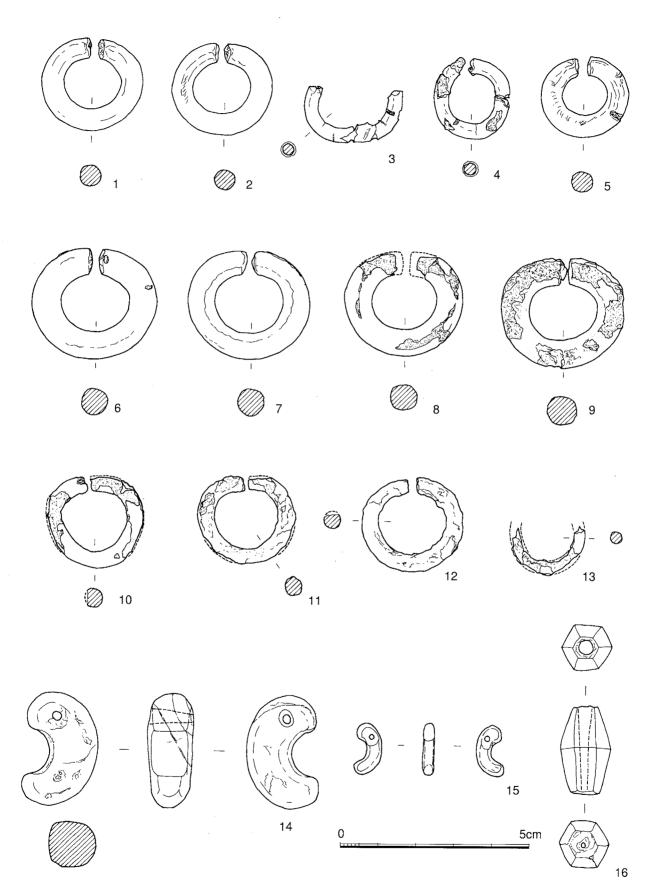
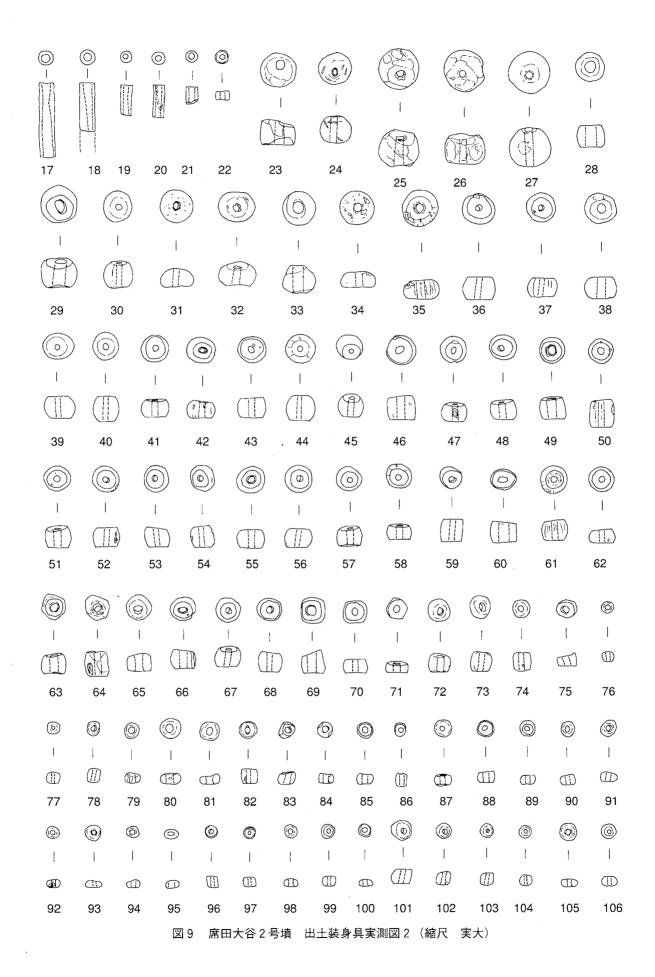


図8 席田大谷2号墳 出土装身具実測図1 (縮尺 実大)



-9-

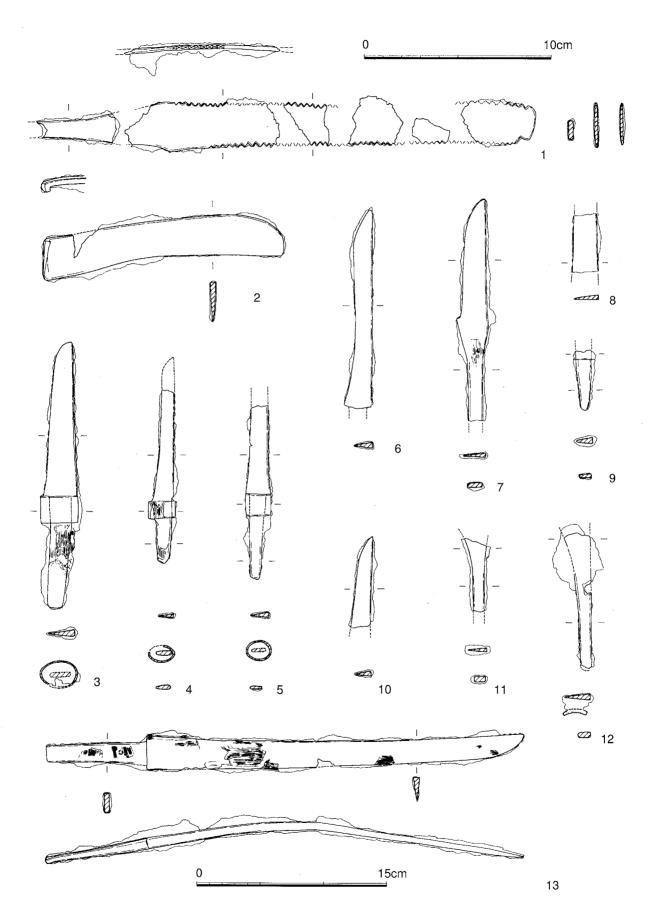


図10 席田大谷2号墳 出土鉄器実測図1 (縮尺 1/2・1/3)

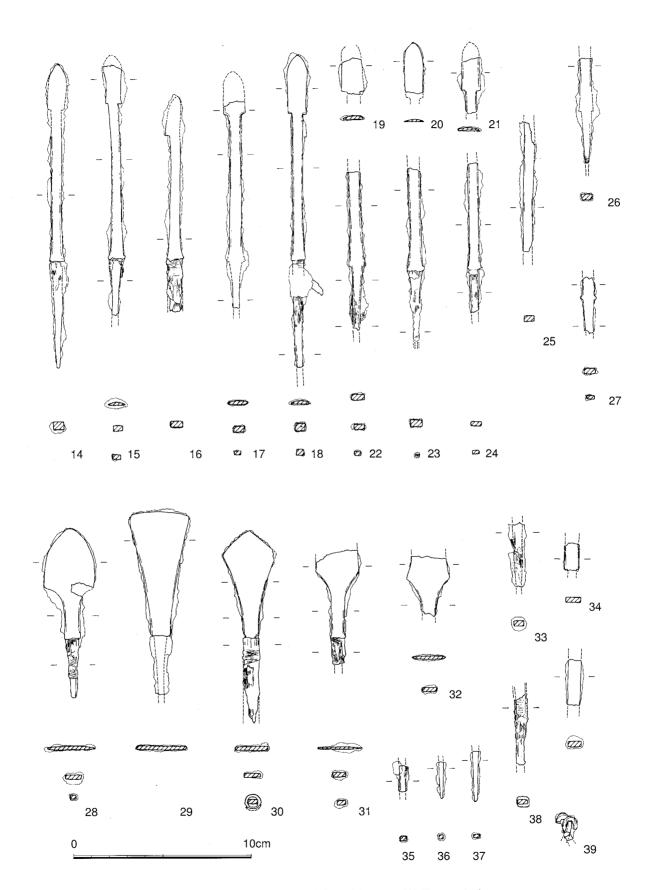
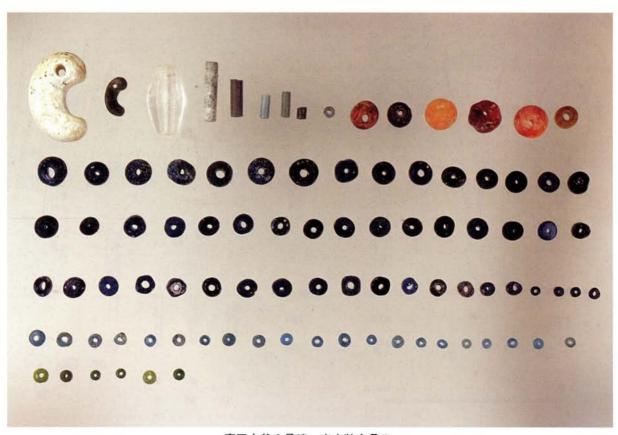


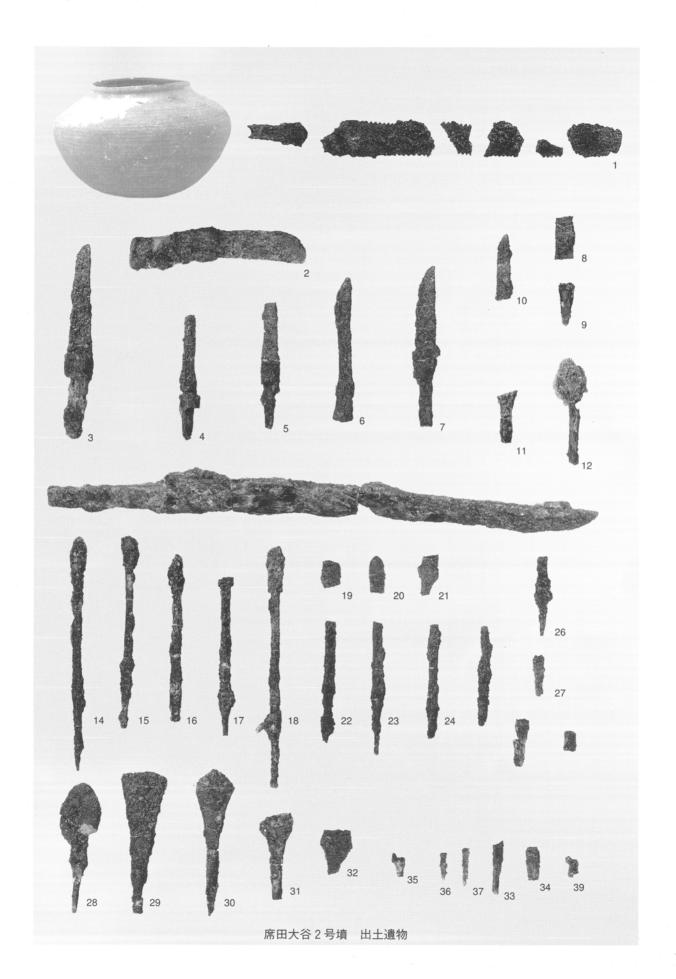
図11 席田大谷2号墳 出土鉄器実測図2(縮尺 1/2)



席田大谷2号墳 出土装身具1



席田大谷2号墳 出土装身具2



The Mushiroda-Otani Ruins 5th. The Board of Education of Fukuoka City 1997, March



1号甕棺墓(西より)



2 号甕棺墓(東より)



席田大谷2号墳石室(北より)



席田大谷2号墳石室(南より)

福岡市埋蔵文化財調査報告書第537集 大谷遺跡群 1997年3月31日

一席田大谷遺跡群5次調査一

編集発行:福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号 埋蔵文化財課

₹810☎092-711-4667

印刷 所:株式会社博多印刷

福岡市博多区須崎町8-5

☎092-281-0041